大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十七卷　第三號

昭和三年九月一日發行

論叢

租稅組合論……法學博士　神戸正雄

海運に於ける運賃の最高限度……經濟學博士　小島昌太郎

ジムメル社會學概念批判……文學博士　米田庄太郎

時論

日支通商條約廢棄について……法學博士　末廣重雄

說苑

學と實踐……經濟學士　福井孝治

ベルギー國立銀行制度の改正……經濟學士　松岡孝兒

雜錄

普國に於ける小學校經費負擔の調節……經濟學士　中川與之助

勞働者家族所得保險について……經濟學士　近藤文二

獨逸國の臨時部會計……經濟學博士　汐見三郎

法令

農業倉庫奬勵規則

（禁轉載）

ジムメル社會學概念批判

——一般社會學の概念(三)——

米田庄太郎

(四) 特殊社會學の概念——ジムメルの形式社會學概念の批判

(6)「社會科學の方法論に就て」に於ける社會科學一般の概念並に其の批判

ジムメルは千八百九十四年に「シュモラー年報」に於て「社會學の問題」を公にしたる後、千八百九十六年にヤハリ同年報に於て「社會科學の方法論に就て」を公にするまでに、彼の當時の認識論の根本思想を簡明に論述せる二つの論文を公にして居る。其の一は「カントは吾々に對して何であるか」(Was ist uns Kant?—Sonntagsbeilage der Vossischen Zeitung)、其の二は「陶汰論と認識論との關係に就て」(Über eine Beziehung der Selectionslehre zur Erkenntnistheorie, Archiv für Systematische Philosophie)である。そうして此の二論文はジムメルの思想を發達史的に研究する

爲めには、重要なる意義を有するものであるが、此處ではそれを論述する暇はないから、只彼は其等の論文に於て、英米思想の影響を受けながら、しかも英米のプラグマチズムス論者とは獨立に、プラグマチズムズ流の認識論を創說したと云ふだけに止め、直ちに「社會科學の方法論に就て」を考察することゝする。

此の論文は同年に出版されて大に學界の注意を惹いたシュタムラーの「經濟と法律」(Stammler, Wirtschaft und Recht nach der materialistischen Geschichtsauffassung, 1896) の方法論を簡單に批判せるものであるが、其の中には彼の當時の社會概念の眞義が簡單ながら明白に論述されて居り、且つ當時彼が盛んに主唱して居たもので、其の後にありても彼の社會學の根柢に常に存在する彼の相對主義の眞義が、簡明に併し深奥に論述されて居るので、私は此の論文はジムメルの社會學の發達を研究するものに對して重要なる意義を有するものと思ふ。然るにジムメル社會學研究者はあまり此の論文に注意して居ないから、又我國では「シュモーラ年報」全部を所藏して居る樣な大學の圖書館でなければ、此の論文は容易に閲覽し得られないものであるから、此處に之れに就て少し詳しく述べて置きたいと思ふ。

同論文は三節に分たれて居るが、第一節の始めにジムメルは當時の彼の認識論上から見て重要なる二つの點に就て述べて居る。其の一は如何なる時期に認識の本質に關する問題が、學者の頭

を惱ましてくるかと云ふ點に就てゞある。

『認識の本質、即ち其の意義、其の根源、其の權利に關する問題が、其の深さ及び困難に相應するだけ人間の精神を惱ますと云ふことは、只稀れな場合に於てである。認識作用が生活の實際的並に理論的方面に對して、吾々に有益なる內容を與へる以上は、吾々は其の基礎の疑はしきことに就て全く心を煩はさない。そうして吾々が認識作用の結果を、吾々の內部的欲求に準じて測定して、不充分であるとか、又は之れに矛盾するものであるとか感ずる時に、始めて此の認識作用一般の基礎附け、意味、妥當に關する批判的問題が起つてくるのである。かくてカントの認識批判は、自然科學の百五十年間の發達が、只數學及び力學のみを正當なる認識內容として玉座に登ぼし、隨ふて此の認識內容の全範域が心情の一切の欲求と恐ろしく矛盾するに至つた時に生起したのである。そうして今や同じ理によりて、社會科學的認識作用は夫れ自身の根本的批判を要求すると思はれる。是れ其の內容に關する終りなき論爭中から、只一の疑はれない事實、即ち此の認識作用に訴へなければならぬ現代の切迫せる必要に對して、此の認識作用が不充分であると云ふことが、明かに認められるからである。』

其の二は一切の認識生活に於ける根本的一大對立が、社會科學的認識に於て如何に現はれ、又如何に取扱はれて居るかと云ふことに就てゞある。

『一切の認識生活の黨派的大對立は此處にも現はれて居る。即ち一方に於ては社會生活の事實の記述、歷史的記述を以て終結する一の經驗主義が存立し、他方に於ては普遍的概念から出發し、其の展開からして、只後に又不完全に事實によりて確め得られる眞理を期待する一の構成的組織主義 (eine construktive Systematik) が存立して居る。尙ほ一切の理論的諸範域に特有なる此の對立は、此處では實際的諸問題中に喰ひ込んで居る。かくて一方に於ては、經驗主義的方針は事物の是れまでの進行から、將來の進行を、吾人が其の事實性に服從せねばならぬ處の一の不可避的進行として推斷せんとする。そうして此の方針に於ては、吾人が單に經驗的に受容せねばならぬ諸關係の當體的法則性が、實際的に吾人を動かす力として妥當するものと考へられて居る。併し他方に於ては又、理論に於て單に受容されたる事實を以て滿足せず、事物の概念的に完結せる理性體系を求める傾向が、理性に依て實際的發達を指導せんとし、實際的發達の單なる自然的進行に、理念、價値、自由の有効なる活動を對抗させようとして居る。

今カントは經驗主義と形而上學との論爭を、經驗事物の中に形而上學が如何程、不可避的に包有されて居るかを證明することにより、又形而上學は決して事實的印象の受働的受容でなく、先天的に吾人の中に存立する範疇に從ふて行はれる經驗の改造であることを闡明することによりて、調停した。私はカントが全く自然科學にのみ適用せる此の見地を私の「歷史哲學の問題」に於て、歷史科學に對しても有効ならしめんと勉め、歷史研究が全く經驗的に研究すると信じて居る場合に於ても、如何に多く先天的前定に依存して居るか、又歷史研究の見掛上の精密なる事實性の中に、如何に多くの超經驗的なるものが附着して居るかを證明した。然るに今それとは全く獨立にルードルフ・シュタムラーは、其の著「唯物史觀に從ふての經濟と法律」に於て、同じカン

ト的方法論を社會科學に適用して居る。彼は唯物史觀の經驗主義的方針に反對して、社會的事物一般に關する學問的經驗は只、人間的衝動及び技術の材料から先づ社會の形象を作り上げる一定の諸概念が根柢に存立する時にのみ、可能であることを證明せんとするのである。そうしてシュタムラーは此の根本的對立の理論的方面に於ても亦實際的方面に於ても、同じ批判的解決法を適用せんとして居る。

ジムメルはそれより唯物史觀の根本原理に反對して、法律を以て社會生活の形式、經濟を以て社會生活の質料と見るシュタムラーの見解の大要を述べて第一節を終り、第二節に於て先づシュタムラーの社會概念を批判して居る。

『シュタムラーは「社會」の充分に明確なる概念を探求して、社會的生活は「外部から拘束する規範によりて規制されたる人間の共同生活である」と云ふことに於て、之を見出して居る。そうして彼の論ずる處によれば、右の概念によりて始めて社會生活は一の特殊な學問の統一的對象となるので、人間によりて設定されたる規制が社會的共存を單に自然的なる共存から區別し、又此の規制の外部性、即ち此の規制は其の遵奉の主觀的衝動力に無關係であると云ふことが、同時に社會的共存を道德から區別するのである。かくてシュタムラーに從へば、外部的規制は先天的なるもの das Apriori にして、其の制約の下で社會の領域が一の學問的統一體として現はれるのである。

私はシュタムラーの右の企ての重要性を敢て認めまいとするのでない。吾人が社會と稱する其の特殊な事物が、如何なる見地に從ふて個人の廣大なる並存及び交錯から區別されるかと云ふ問題は、此處にハッキリ掴まれて居る。そうして吾人は此の問題の答解を、左の如くに一般的に云ひ表はすことが出來る。即ち個人を一全體に包括することは理念に從ふて行はれると。かの美術の世界は、吾人が自然的な、美醜に無關心な實在を、美醜の見地に從ふて調整することによりて出現し、かの倫理的世界は吾人が夫れ自身に於ては只因果的に規定されて居るだけの現象を價値に從ふて調節し、云はゞ其の單なる自然的構造に於ては表示されて居ない諸線によりて、其等の現象を結合し分離することによりて成立する如く、社會科學的考察の世界は、吾人が人間によりて設定されたる規制に服從する個人の諸總合を、自然的諸關係の渦から引き出し、社會科學の統一的對象として包括することによりて成立するのである。人間の態度行動が單に自然法則によりて規定されるだけに止まらず、更に人間的規制によりて規定されて居る何處にあつても、其處に「社會」は存立するのである。

併し右の如くに考へることは、單なる一附隨現象或は第二次的な一條件を、社會の積極的生命原理に高めるものゝ如く思はれる。例へば宗教的共同團體は確かに其の共存の一定の外部的諸規制を缺くことが出來ないであらう。併し之を社會的統一體に結合するものは一の最高原理に對する共同的關係の意識にして、其の共同團體が社會として構成されるのは、「外部的に拘束する規範による規制」に依てではなく、各人が他人と信仰に於て一致するを意識することに依てゞある。そうして此の意識は、シュタ

ムラーの定義に從ふて考ふれば、吾人の推斷せねばならぬ如く、社會化が依て以て始めて現はれる單なる機緣に過ぎざるものでなく、此の意識、「不可視的敎會」に於ける此の心理的相互作用は既に社會であるので、かくて其の成員が何等かの外部的規範に依て拘束されると云ふことは、つまり既に存立する社會化が裝ふ一種の姿或は形態に外ならない。又社交的會合或は狹義の社會は、疑ひもなく參加者に於ける動作の外部的規則の多數を前定して居る。併しタトヒ其等の規則が總て守られて居ても、只それだけで狹義の社會が眞に成立して居るとは云はれない。そうして狹義の社會は相互的娛樂、興奮、愉快等が發生する時に始めて、其の意味及び生命原理に從ふて、アリストーテレス的に云ひ表はせば、其のエンテキーに從ふて成立するのである。社會の概念を「外部的規制」の概念から引き出さんとするは、恰も目的行爲の概念を人間の手の概念に依存させようとするのと同じである。と云ふのは確かに何れの目的行爲も、只吾人の手の機構が可能ならしめる運動諸形體に於てのみ遂行され得るものであるが、しかもそれが爲めに此の技術的條件は決して目的行爲の本質をなするものと云はれないからである。規制が社會の創造的條件でないのは、言語がそうでないのと同樣である。音聲語又は身振語なくしては、確かに社會化は全く行はれないが、他方に於ては同樣に社會化なくして言語は存立しない。かくて言語は規制と同じく、社會の一條件或は一形式、一生產物或は一共同生產者であるが、併し決して社會の中核及び本質其物ではないのである。

然らば規制と云ふは何を意味し得るか。私が誤つて居なければ、シュタムラーにとつては中心的な此の概念の定義が、彼の著作中何處にも全く見出され得ない。併しそれは只動作或は行動の同樣性の命令、保證、企圖等を意味し得るだけである。一團體の一人の動作は、同樣に制約する地位或は狀態に於て常に同樣なる行爲が現はれる時に、「規制されて」居ると云はれるのである。そうして今社會が存立し得る爲めには、行動の一切の內容を看過すれば、行動の形式のかゝる同樣性が存在せねばならぬことは疑はれない。個人が絕對的恣意を以て、同一の地位或は狀態にありながら、常に變動する行爲を以て反動する時には、個人は存立し得ないと同じく、社會の成員間に同樣な不同樣性が發見される時には、社會も亦決して存立し得ないであらう。されば規制は一たび生起せる社會が更に存續する爲めの條件に外ならないので、決して其の生起の形成條件ではない。尙ほシュタムラーは社會的規制を、外部的な、卽ち其の遂行の主觀的動機から全く獨立する、規制として明かに表示することによりて、其の中から道德的規制を除去せんとするが、此の事も亦社會の本質に關する吾人の洞見を毫も促進しない。是れ一の規制が主觀の內部から生來する規制に對立して外部的なものである爲めには、既に社會の存立するを要するからであり、其の規制が內部から生來す可きものでないとすれば、それは只主觀が拘束される主觀外の諸主觀卽ち一の社會からのみ生來し得るからである。かくてシュタムラーの定義はクル〳〵循環して居るのである。

社會的哲學的研究に於ては、私は多數の個人が相互作用をなす何處にありても、社會が存立すると云ふよりも以上に詳しく規定されたる社會の定義から、出發し得るとは信じない、しかも亦それだけの定義は是非必要である。と云ふのは社會が一の獨立なる科學の特有の對象である可くは、それは只社會を作る個人の總計から一の新しき統一體が生起すると云ふことによりてのみ可能であるからである。若し然らずば社會科學の一切の問題は、個人心理學の問題に外ならぬものとなるであらう。併し幾多の要素からの統一は、其等の諸要素の相互作用に外ならぬ、卽ち其等の諸要素が相互に他の上に行なふ粘着、牽引、更に恐くは一定の反撥に外ならぬ。個人的諸要素をより高等なる社會的統一に結合する此等の相互作用が、規制の形式に於て行はれると云ふ

ことは承認され得るが、併しそれは社會化の本質を意味するものでなく、只其の一屬性を意味するだけである。

人々は私の社會の定義に對して左の如き批評を加へるかも知れない。即ち私の定義によれば相戰ふ、かくて相互に仇敵として作用する二つの軍隊も、やはり一の「社會」を作つて居ると認めねばならぬと。私は事實上戰爭を社會化の一の極限的場合として考へたいと思ふ。何人も競爭が一の社會的原理であることを疑はないであらう。否な恐らくは何れの社會化も物理的世界の如くに、牽引力の外に反撥力を要するであらう。競爭及び憎惡、抑制及び疎外が之れに對抗する結合的諸力と協力して、此處に始めて明確に限定されたる社會的諸形式が成立するのである。只吸心的諸傾向のみが支配する場合には、混沌たる團塊に化するであらうと思はれる諸關係が、明確に限定されたる形式をとるのも亦、屢々競爭及び憎惡、抑制及び疎外等の諸力の協力することに因るのである。戰爭は統一する諸力の總量が、反撥する諸力に對して限界價値零度に近づく處の相互作用、或は相方共に遵奉する戰事法が承認されて居ない場合には、限界價値零度に達する處の相互作用である。かくて吾々は戰爭を社會化の極限的場合と見るとも、それは決して上に述べし社會化の概念的確定に矛盾するものでない。』

終りにジムメルは第三節に於て、社會生活を統一體として社會學特有の對象となす爲めには、最高唯一の規範的理想の必要的なることを主張するシュタムラーの說を批判して、彼れ自身の當時固持せる相對主義の眞義を闡明し、又それによつて社會科學に於ける歷史法と唯理法との眞實なる調和を企だてゝ居る。

『シュタムラーは一切の相對主義に反對して、社會的諸努力內に於て、單に主觀的な、只與へられたる地位或は狀態の衝動のみから發生するものと、客觀的に基礎附けられ、普遍妥當的見地に從ふて正當と認められるものとの間に、一の無制約的區別を立てる必要を主張して居る。そうして彼の論ずる處によれば、內容的に決定されたる社會的實在或は事象にして、絕對的に正當とされるもの、絕對的理想として主張され得るものは一も存しない。併し形式的理念としてのかゝる理想（それに依て經驗的な或は求められたる社會的狀態が、客觀的に正當とされるや否やが決定される、即ち其の概念上具體的には實現さる可きではないが、併し一切の個別的目的の上に立ちて之を裁判する處の、一切の社會的判斷の一の最上統一見地は存立せねばならぬ。そうしてシュタムラーは右の如き終極目標として、「自由に意志する人間の共同生活或は共同社會」を承認するのである。

併し私は右の規範的理想の規定は、方法論的に興味なきものとして、此處に之を看過し、そうしてシュタムラーによりて主張されるかゝる理想一般の必然性を問題とする。シュタムラーは理論認識作用との類比に基いて立論して居るが、彼の論ずる處に

よれば、理論的認識作用にありても直接の知覺事實はまだ客觀的眞理でない。そうして感覺的個別の混亂から、純粹主觀性を超出せる妥當的眞理が生起する爲めには、自然の普遍妥當的法則性及び客觀的統一性の思想が、既に根柢に存立して居なければならぬ。それと同じく、主觀的に偶然的なる社會的欲求努力と、客觀的に正當とされる社會的欲求努力との區別が一般的に立てられる爲めには、一の最高理由が存在せねばならないであらう。蓋しかゝる最高理由が存在しなければ、何れの社會的制度に就ても、之を是認する爲めの共礎附けも、亦之を排斥する爲めの基礎附けも、一般的に成就され得ないからである。併しシュタムラーの右の平行的論法は、一見して信じられるほどの證明力を實際に有するものでない。吾人が理論的認識内にありて、主觀的印象と客觀的眞理との間に區別を立てる場合には、此の區別は自我の彼岸に存立する一の客觀的世界の前定を基礎として居る。そうしてそれによりて、此の世界と合致する表象は、此の關係を缺く表象に反して、客觀的として特質附けられるのである。然るに意志、價値設定、實際的表象は己れとの結び附きの有無によりて、己れの客觀性又は純主觀性が依て以て決斷される何物をも己れに對して有しない。要するに思惟は經驗的に夫れから獨立する世界との合致に於て其の標準を見出すが、然るに特異なる各實際的表象が依て以て是認される可き最高の規範も、より低き諸規範と同樣に、まさしく人間の價値設定内に存立するのである。かくて客觀性と主觀性との對立は、理論的範域に於ては意志の範域に於けるとは全く異なれる意味を有する。認識の統一は思惟と經驗との相互的督觸に於て一の定點を見出すが、意志の領域にはかゝる標準が缺け、隨ふて其の内容の客觀的統一と其の主觀的諸個別との對立は缺けて居るのである。

然らばシュタムラーが實際的社會的世界形象の統一性を包含す可きものと見る處の、理論的世界形象の其の統一性とは本來何を意味するか。其の統一性はつまり吾人の個別的認識表象は規則に從ふて連結すると云ふことに於て成立する。但し決して唯一の最高規則に從ふてと云ふのではない。そうして其の見掛上の統一は内部的に相連結して居ない幾多の原理、例へば矛盾の原理、因果法則、數學的公理等に分裂して居る。かくて吾人が矛盾の原理に準じて考へる世界は、尙ほ因果的に調整されるを要せず、因果的に調整されたる世界は、尙ほユークリド公理に從ふを要しない。吾人の數學は、因果法則が其の中に含有されて居ると云ふことなしに、完全なる妥當性を有し得るであらう。されば「認識の統一」とは只、認識の個別的諸内容は或最高諸原理の規範に從ふて調整されると云ふことを意味するだけである。但し其等の諸原理は其の内容に從ふて何等の「統一」をも形成するものでなく、只理論的世界形象に於て並列的に妥當するだけである。

されば理論的認識との類比は、シュタムラーの考へる如く、社會生活の形象は吾人が其の最高目的統一に達するまで完成されないと考へる可く、決して吾人を强制するものではない。寧ろ社會生活に於ても種々なる傾向は相併流し、そうして其の各々は夫れ自身に於て一の最高なる、それ以上に還元さる可からざる終極目標に向つて進むと云ふことは、充分に可能であるのである。かくて私の信ずる處によれば、個人主義及び集團主義、進歩的考へ方及び保守的考へ方、服從の本能及び並立の本能、抽象的性向及び感覺的性向等は夫れ夫れ別々な社會的理想を求め、そうして其等の理想は各々最高法院を構成するのである。尙ほ此等の諸傾向間に衝突の起る場合に、一の決斷が客觀的に正當として、他の決斷が謬つて居るとして判斷され、かくて其等の個々の傾向以上に一の高等なる標準が前定されて居るが如くに見える時でも、吾人は其の高等なる標準と思はれるものに於て、只或個人の大なる心理的勢力か、又は一層屢々個人の團結の大なる心理的勢力かゞ、表現して居ることを直ちに觀破し得るのである。是

れ經驗が特異なる諸場合に於て、幾度も繰り返して確實に證示する事實である。されば吾人はシュタムラーが忌避する懐疑主義及び經驗主義的淺見に陷ることなしに、右に述べし事を承認し得るのである。

要するに各時代は其の實際的生活に於ても、特に固定せる信仰及び傾向の一圍塊を有し、そうして其等の信仰及び傾向は一切の個別的表象及び欲求に對して、客觀的なるものを表現するのである。然るに諸標準の此の複合體は歴史的に生起せるものであるが故に、又歴史的に種々に改變される。さうして其等の改變は一方に於ては、社會心理的内容の云はゞ有機的自己發達の稍々茫漠たる過程によりて行はれ、他方に於ては其の複合體は強調される度合大に增長して支配的地位に上り、かくて全體を變更し得ることによりて行はれるのである。されば内在的又は外部的修正或は改變によりて、是れまで最高な客觀的原則であつたものの上に、最後の諸原則の一新層が現はれて、新に是れまでの諸標準の標準となる。そうして此の過程の總ての階段に共通するものは、只眞と僞、客觀的なるものと主觀的なるもの、論理的なるものと心理的なるものの等の一般の諸對立だけであるが、併し此等の諸對立は當面に於ける最も普遍的な、最ともの固定せる、最ともの强調されて居る諸表象と、それ以下の諸表象との關係を抽象的に表現するものに外ならない。

今右の考へ方は決して懐疑主義ではない。寧ろそれと反對に、認識、倫理及び社會に對して普遍妥當的な絶對的統一的な一理想を固守することは、吾人がかゝる理想に對して起る處の決して終結しない論爭や、決して除去されない不確實や、決して充足されない不滿に陷る場合には、必然的に吾人を懐疑主義的絶望に導かねばならない。然るに吾人は客觀的なるものを、認識並に行爲に於て、一の關係概念（當面に於て歴史的に支配する諸表象及び諸傾向と、より弱き或は一時的な或はより個性的な諸表象及び諸傾向との關係を表現する處の）と解する時には、確定せる一の立場（固定沈滯せる立場ではない）を獲得するのである。是れかの絶對的當體的に正當なるものが存するとするも、しかもそれは只歴史的に支配力を獲得する表象の形態に於てのみ、吾人が接近し得るものであり、かくて認識論的には此の表象の無用な重複を呈示するだけのものであるからである。但し此の事は云ふまでもなく、吾人が理論的範域並に實際的社會的範域に於ける當面の最高諸見地を、發生的に區別して、それが欲求努力の一切の個別性及び主觀性に對立して、客觀的なるものを表現するものであるが如くに取扱ふことを、決して妨げない。

一の思想は常に只他の思想との關係に於てのみ「眞理」であるので、決して一切の思惟の外に存立する絶對的眞理理想との關係に於て「眞理」であるのでない。思惟の全體が眞理であるのでないことは、物質の全體が重量を有するのでないのと同じである。そうして吾人が謂つて一方に於ては全體に、又他方に於ては個々の要素夫れ自身に轉嫁する處の諸形質は、只都分相互の關係に於てのみ妥當するのである。世人は林檎は只地球との關係に於て重量を有するものなること（地球は林檎との關係に於て重量を有する如く）を洞見するまでは、長年月間林檎が夫れ自身に於て重量を有するものと考へて居た。シュタムラーは客觀的に正當なるものと單に心理的に生起せるものとの區別を證明する爲めに、自然法則例へば引力法則の眞理はニュートンが依て以て之を發見した心理的諸事情及び諸力から全然獨立して居ると云ふ考慮を、屢々利用して居る。彼の考へる處では此の眞理はそれ自身に基づく妥當性を有するので、それは偶然的な心理的狀態に於て大なり小なり實現され得るが、しかもかゝる心理的狀態は其の

眞理の內容に何等の變更をも加へるものでない。併し吾々の考へる處では引力法則は實際上只吾人の表象世界の一定の諸要素を、最とも適切に又は最とも矛盾なく包括するが故にのみ「眞理」であるのである。其の法則は只其他の科學的世界形象の一定の狀態及び發達程度に於てのみ「眞理」であるので、幾千年後には多分それは謬見となるであらう。そうして上述の確信は、只人々が絕對的に客觀的な眞理（確かに如何なる人力も到達することの出來ないもの）の存在を信ずる以上に於てのみ、懷疑主義として彼等に現はれ得るものである。それは恰かもカントの觀念論が、人々が絕對的意味に於て吾々の外に存立する世界（一切の吾人の表象に對して單なる浮遊する夢であらねばならぬもの）を確信する以上、現實なる外界の否定として彼等に現はれねばならぬのとまさしく同じ理である。尙ほ吾人は倫理的及び社會的世界內に於て、實體的にして普遍妥當的な一の理想（實際上如何に普遍的であるにせよ）を創定せんとする總ての企だてに、同樣な批判を加へることが出來るのである。

今私が此處に主張する相對主義的見解を充分に高く且つ廣く解するに於ては、それは相對主義のより低さ又狹き諸種類が反對の理論即ち唯理主義的及び絕對主義的理論に求めねばならなかつた幾多の補充を、それ自身の中に含有して居る。かくて右の見解により、例へば國民經濟學に於ける歷史派と理論派との論爭は左の如くに解決されるであらう。即ち各經濟的「法則」に就て、吾人は其の妥當性は經濟的地位の特殊な歷史的條件から、其の認識は時代の經濟的狀況の特殊な歷史的條件から、推論され派生されるものなるを承認し得るであらう。併し此の歷史的過程は只、右の歷史的推論の先天的者（das Apriori）を形成する一定の當體的に妥當する諸命題及び諸概念の前定の下に於て、又之を利用することによりてのみ、理解し得られるものである。更に此等の命題及び概念は又先行する歷史的發達に基いて立てられたるものにして、そうして此の歷史的發達は又認識に於て成立する爲めにも亦夫れ自身に於て成立する爲めにも、一定のより單純な、當體的に妥當する諸規範を要し、吾人は此の如くにして交互的に無定限に遡らねばならぬ。かの歷史法と唯理法との二つの方法は「相互に補充さる可き」ものであると云ふ、あまりに一般的にして意義なき要求は、此處に一の確實なる原理、即ち各唯理主義的定理は其の理解の爲めに一の歷史的推論或は派生を要し、又此の歷史的發生は唯理主義的先天的者なくしては理解され難きものであると云ふ原理によりて、取り代へられるのである。そうして此の原理中に据へつけられて居る無定限遡求（regressus in infinitum）は、與へられたる各狀況或は地位を超出せんとする吾人の知識の完成不可能性の余燼正當なる表現である。カント流に云ひ表はせば、此處に吾人は構成的な又そうであるとして融和され難き二つの原理を與へられて居るのでなく、其の各々が他の基礎である處の二つの規制的原理を與へられて居るのである。かくて此處に問題となるは、二つの相反對する方法を器械的に混合すること或は折中的に妥協させることではなくして、兩者を一の包括的方法論の相交代する二つの階段として運用することである。

却說ジムメルは「社會科學の方法論に就て」に於て、以上述べしが如くに論じて居るのであるが、今本節の主旨から見て私の先づ考察したいと思ふのは、ジュタムラーの社會概念を批判しつゝ論述して居るジムメル自身の社會概念である。そうして此のシュタムラー對ジムメル社會概念

論爭は、之を同じ頃佛蘭西の社會學界で行はれたヅュルケム對タールド社會的事實論爭と比較すると、吾人は現代社會學の研究上甚だ興味ある又重要なる一事實を發見するのである。私は兩者を比較對照し、一層廣い又高い立場から、シュタムラー及びヅュルケムの見解とジムメル及びタールドの見解とを批判的に總合し調和することによりて、社會現象の最とも正當なる概念の中核を決定することが出來ると信じて居る。併し此處で此の問題を詳しく論述する暇はないから、只私の所見の要點を少しく述べるに止めるが、要するに社會概念の規定に於て外部的規制を本質的なるものと見るシュタムラーの見解と、社會的事實の概念の規定に於て社會的事實の外在性(卽ち個人意識の外に獨立に存在すると云ふ性質)及び强制性(外から或は上から個人意識を强制すると云ふ性質)を最とも著しき外部的特徵と見るヅュルケムの見解とは、大體上根本的に一致して居る。更に外部的規制に內部的服從を包攝せんとするシュタムラーの見解と、外部的强制に內部的服從を包攝せんとするヅュルケムの見解とも、大體上根本的に一致して居る。(但し此の點に就てはシュタムラーの論述はヅュルケムの論述ほど明瞭でなく又詳しくないと思ふ。)然るにジムメルはシュタムラーに反して、社會概念の規定に於て宗教的共同社會や、社交的社會卽ち狹義の社會と稱するものに就て、彼の論する處によりて知られる如く、社會の本質或は積極的生命原理として內部的な心理的相互作用を重要視し、外部的規制を以て其の一屬性或は一の附隨現象或は第二

次的必要條件と見做して居る。そうして其の點に於てタールドがヅュルケムに反して、社會的事實の規定に於て、其の根本的特徴として彼の所謂摸倣なるものを重要視し、外在性及び强制性を第二次的なるものと見る主旨と、大體上根本的に一致して居る。かくてタールド及びジムメルは夫れ夫れヅュルケム及びシュタムラーに反して、內部的なる心と心との相互作用を根本的に重要視し、外部的規制や外在性及び强制性を第二次的のものとして包攝せんとする見解に於て、大體上根本的に相一致して居るのである。

今私は右に述べしが如くに、ヅュルケム及びシュタムラー方針とタールド及びジムメル方針とを對比して考へる場合には、大體上後者を是認するのである。卽ち私自身の言葉で云ひ表はせば、私は社會現象の元素的根本的事實は心と心との相互作用である、一層詳しく云へば心と心との相互作用と、夫れから成立する心と心との相互關係であると見るのである。但し私は心と心との相互作用と、心と心との相互關係とを右の如くに區別して考へるのであるから、私の心と心との相互作用の概念は、詳細に於てはタールドやジムメルの心と心との相互作用の概念とは異なつて居る。更に私は心と心との相互關係を親和と反對とに根本的に區別し、且つ兩者を同位的な心と心との相互關係の二大部類と見るのであるから、私の見解はタールドやジムメルが外部的規制又は外在性及び强制性を第二次的或は從位的なものと見る見解とも異なつて居る。要するに私は

心と心との相互作用及び相互關係を、社會現象或は社會的現實態の元素的根本的事實と見る見解の下に、タールド及びジムメルの見解と、ヅュルケム及びシュタムラーの見解とを包括し調和せんとするのである。此處に私の社會現象の一般的概念を詳しく論述する暇はないから、只以上述べし如くにタールド及びジムメル並にヅュルケム及びシュタムラーの社會概念に對して、私の社會現象の概念は大體上如何なる態度をとり、如何なる地位を占めんとするものであるかを、指示するだけに止める。

次に私が「社會科學の方法論に就て」に於けるジムメルの所論に就て此處に特に注意したきは、社會を統一的なる一全體と見る爲めには一の規範的理想が必然的であると云ふシュタムラーの見解に對して、ジムメルが之れに加へて居る批判並にそれを機緣として論じて居る彼の相對主義の根本思想である。さきに述べし如くシュタムラーは社會的世界形象の絶對的統一性を確立する根據は、理論的世界形象の絶對的統一性を確立する根據に准じて論證さる可きもの、或は前者は後者の中に包含されて居ると考へるのであるが、之れに對してジムメルは、先づ理論的世界形象の統一性は認識論上當然相對的である可きものにして、決して絶對的であり得ない理由を論證し、隨ふて、尙ほ又夫れ以上の理由によりて、社會的世界形象の統一性が決して絶對的であり得ず、常に相對的であらねばならぬことを論證せんとするのである。かくてジムメルの見解に從へば、

社會的世界形象が絶對的統一性を有する或は有し得ると考へるシュタムラーの見解は、根本的に謬つて居ることになる。

今ジムメルがシュタムラーに加へた右の批判、並にそれに結び附けて論述して居る彼の相對主義の根本思想を、此處で詳しく論評することは到底不可能であるから、ヤハリ只極一般的な評價を下すだけに止めるが、私の見る處によれば先づ此の場合に科學の立場と哲學の立場とを嚴密に區別して考へることが肝要である。そうして科學の立場から考へるに於ては、私はジムメルの相對主義の根本思想は大體上正當であると思ふ。科學は經驗的實在を其の儘に理解し、了解せんとするものとして、本來相對主義的である可きものにして、決して絶對的知識を求めるものでない。是れは經驗的實在が本來相對的なるものにして、絶對的なるものは一も存在しない以上、當然そうある可き筈である。ジムメルが此の論文を公にせる千八百九十六年には、さきに述べし如く引力の法則も幾千年の後には多分謬見となるであらうと云ふて居るが、併し幾千年處が幾十年さへたゝぬ今日、既に其の儘では眞理でないと考へられて來たのである。かくて社會或は社會現象も科學の對象として取扱はれる以上は、吾人はそれに就て獲得する知識は常に相對的なるものであらざるを得ない。只段々に絶對的知識に近づくことを望み得るだけで、現實には決して絶對的知識に到達することが出來ず、常に相對的知識を以て滿足せねばならぬ科學にありては、其の

對象とするものが自然現象であるか社會現象であるかを問はず、其の獲得する知識の相對的なものであることは當然である。されば私の如く社會學を始め一切の社會科學を、嚴密に科學として確立せんとするものにありては、ジムメルがシュタムラーに加へた批判を正當と認めざるを得ない。科學としての社會學は社會現象或は社會的現實態に就て、其の元素的根本的方面に於ても亦其の總合的方面に於ても、常に只相對的知識を求めるだけであつて、決して何等の絕對的知識をも求めるものでない。

併し此處に注意す可きは、ジムメルは彼の相對主義を科學に適用するだけに止まらず、哲學にも適用して居ることである。そうして其點に於ては私は彼の見解を承認することは出來ない。併し此處で上述の彼の相對主義の哲學上の價値を批判する暇も亦必要もない。殊に其の後彼の生命哲學の思想が發達するにつれて、上述の如き彼の相對主義は重大なる修正を加へられて居るから、吾人若し哲學上から見て彼の相對主義を批判せんとするに於ては、其の後殊に千九百年の著「貨幣の哲學」以後の著作に就て考察せねばならない。それで此處では彼の哲學的相對主義其物の批判は差し控へて置くが、併しさきに述べし處によりて察せられる如く、彼の此の時代の哲學的相對主義をも社會科學に適用してシュタムラーの說を批評して居る點に就ては、此處でも看過することは出來ない。さきに述べし如く、彼はシュタムラーの說を批評する中に左の如く述べて居

る。

寧ろ社會生活に於ても種々なる傾向は相併流し、そうして其の各々は夫れ自身に於て一の最高な、それ以上に遡元さる可からざる終極目標に向つて進むと云ふことは充分に可能である。かくて私の信ずる處によれば、個人主義及び集團主義、進歩的考へ方及び保守的考へ方、服從の本能及び並立の本能、抽象的性向及び感覺的性向等は夫れ夫れ別々な社會的理想を求め、そうして其等の理想は各々最高法院を構成するものである。

右の言葉によりて見れば、ジムメルは社會科學は唯一絶對の理想を取扱ふものでないが、併しそれ〴〵の傾向の終極目標たる、それ〴〵の理想を取扱ふものと認めて居る樣である。併し社會學を始め一切の社會科學は、嚴密に科學として考へらる可きものであるならば、夫れはジムメルが右の言葉の中に解するが如き意味にて、如何なる社會的或は文化的理想をも取扱ふ可きものでなく、之を取扱ふのは哲學である可きである。かくて彼は此の論文に於ては社會科學に就て嚴密なる科學的研究と哲學的考究とを判然區別して居ないことが推察される。併し其の後の彼の社會學上の著作に於ては、彼は何れの社會學上の問題に就ても、大體上哲學的考究を避けて專ら科學的研究に力を注いで居る。しかも詳しく吟味して行くと種々なる點に於て、彼は不知不識に哲學的考察を混交して居ることが發見されるのである。是れは社會學の專攻者でも亦何れの科學の專攻者でもなく、本來哲學者であつた彼にありては、避け得られない傾向であると思はれるが、併し科學としての社會學の專攻者たらんとするもの、又社會哲學の存立及び必要を充分に承認するが、しかも社會學を純然たる科學として建設せんとするものゝ、常によく注意して避げる可く勉

めねばならぬ點である。

(7)「社會學」第一章に於ける形式社會學概念の發達及び其の批判

ジムメルが千九百八年に公にせる Soziologie は、彼が單行本として公にせる社會學上の最初の著作であり且つ又最も大部な著作であるが、併し其の各章の主論は何れも既に彼の他の著作中に論述されて居るものであり、且つ各章の餘論も同樣である。そうして其の全體が組織的に統一されて居ないので、大體上一の論文集と見做さる可きものである。タールドの名著「模倣の法則」も大體上同樣な著書にして、此の點に於ても兩者は相似て居る。但し「模倣の法則」の「社會學」よりもより組織的である。併しジムメルが「社會學」中に收めた諸論中、他の著書及び論文に於て論述されて居るがまゝのものは少なく、大なり小なり修正增補されて居る、更に全く書き改められて居るものもある。尙ほ實質的には重大なる改修を加へられて居るものもある。此處に私が特に吟味せんとする第一章「社會學の問題」の如きは其の一例である。本章は千八百九十四年の論文「社會學の問題」と同じ題目を附せられて居り、そうして其の內容も一見すれば同論文の主旨を一層詳しく論述せるものに外ならない樣に考へられるが、併し詳しく吟味して行くと、實質的に重大なる差異が見出されると思ふ。そうして此の事は、千九百年頃から彼の思想上起れる重大なる變動から考へて當然豫期さる可きものである。此處に此の變動に就て詳しく論述することは出來ないが、要するに彼は其の頃からして論理的並に價値的絕對者を承認して來たのである。かくて彼は普通に承認されて居る處の物理的或は物的なるものと心理的或は心的なるものとの二種の存在種類の外に、第三種の存在種類即ち概念、論理的規範、自然法則の存在種類、なるものの存在種類の外に、第三種の存在種類即ち概念、論理的規範、自然法則の存在種類、觀念的內容の世界を認め、其の實在樣式は妥當の樣式であると考へた。そうして此の變動はリッケルトの價値哲學やマイノングの對象論やフッサールの現象學の影響を受けて起れるものであるか、又はジムメル自身に於て獨立に起れるものであるか、私は此處に言明することは出來ないが、とにかく彼の思想は其等の哲學者と同じ方針に於て變動して來たのである。尙ほ彼は其等の三つの世界の外に第四の世界をも認め、之を觀念的要求と稱した。但し此處にジムメルが要求と云ふは、單なる主觀的願望とか、要求されると云ふ感じとかを意味するものでなく、物件 (die Sache) 其物と一緒に與へられ、精神及び世界との關係に於て豫め形成されて居る處の當爲を意味するものにして、そうして彼は此の當爲は實在が支配されるとは異なれる特殊な論理であるが、併し同樣に超主觀的なる論理によりて支配されて居ると考へたのである。

吾人は「社會學」第一章「社會學の問題」を、千八百九十四年の「社會學の問題」に比較して、其の眞義をよく理解する爲めには、右に述べしが如き千九百年頃からのジムメル思想の重大なる變動に注目しなければならぬ。そうして本章に於てジムメルの論述して居る形式社會學の概念は、一先づ大成されたる彼の形式社會學概念と見做し得られるものにして、實際上社會學者間にジムメルの形式社會學として一般に知られて居るものは、即ち本章に於て論述されて居るものに外ならない。是れ彼は其の後十ケ年を經たる千九百十七年、即ち彼の死去の前年に「社會學の基本問題」を公にするまでは、社會學概念に關しては新たに何物をも論述しなかつたからである。

上に述べし如く、「社會學」第一章「社會學の問題」に於てジムメルの論述して居ることは、餘論「社會は如何にして可能であるか」を除けば、大體上千八百九十四年の論文「社會學の問題」の主旨を詳しく論述せるものであるから、かくて私は同論文の形式社會學概念一般に就て加へたる批評、殊に彼の形式社會學なるものは決して他の社會科學と同樣な特殊的社會科學ではなく、一の一般的社會科學であると云ふ批評は、此處に其の儘に「社會學」第一章の形式社會學概念にも適用されるのである。それで此處には同じ批評を再び繰り返すことは出來るだけ避けたいと思ふ。又本書第一章はジムメルの社會學を學ぶ人々の熟知して居るものであり、更に本書は前節に述べし論文「社會科學の方法論に就て」とは異なり、何人も容易に手に入れられるものであるから、此處に第一章の內容の組織的紹介は省略し、只私の見解を確かめる爲めに、彼が千八百九十四年の論文以上に深く又新たに論述して居る二三の點に就て、批評するだけに止める。

(a) 一の獨立なる科學として社會學は如何にして可能であるか。

一の獨立なる科學としての社會學の成立を深く根本的に論證する爲めに、シムメルは一般に獨立なる科學は如何にして成立し得るかを論じて居るが、其の論ずる處によると、

總て吾人が卒直に事物(Gegenstand)と稱するものは、諸般の規定及び關係の一複合體にして、其等の規定及び關係の各々は事物の多數に於て現はれるから、一の特殊な科學の對象となり得るのである。かくて各科學は一の抽象に基いて居る。是れ科學は、吾人が如何なる科學によりても統一的に把捉することの出來ない何れかの事物の全體を、それの諸側面の何れかの一に從ふて、或は何れかの一の概念の見地から、考察するものであるから。各科學は事物の總體及び諸事物の總體に就て、其の總

體を個々の諸形質及び諸機能に分析的に分割することによりて生成するものにして、そうして此の分析的分割は、其等の個々の形質及び機能を夫れ〳〵引き出して、夫れが現實なる諸事物に於て現はれる一切の場合に於て、夫れを組織的聯結に從ふて把捉することを可能ならしめる一の概念が發見されることによりて、成就されるのである。

今右に述べしジムメルの科學論は、重大なる一創見であるが如くに考へる人々が、我國の社會學者中にある樣であるが、併し社會學者間に發達せる科學論だけに就て考察するも、夫れは決して創見と見做し得られるものでない、殊に完全なる科學論とは認め得られないものと思はれる。そうして私は此の點に於ては、ギッディングスがスペンサーの科學分類論（卽ち科學を抽象的科學（論理學や數學の如く關係を說明する諸科學）と抽象的具體的科學（質量的物理學、分子物理學及び化學等の如く性質或は特有性 Properties を說明する諸科學）と具體的科學（天文學、地質學、生物學、心理學及び社會學等の如く集合全體 Aggregates を說明する諸科學）とに分つ說）を批評して論述せる見解は、大に注目す可きものであると思ふ。ギッディングスの論ずる處によれば

スペンサーの分類に於て不必要な又混亂を生ずる部分は、抽象的具體的科學の部類である。諸特有性或は諸力の說明は諸關係の說明と同樣に眞に一の抽象的科學である。一切の科學に於て吾人は左の二者の一を遂行せねばならぬ。卽ち吾人は相集まつて完全に具體的なる一集合體を構成する諸關係、諸特有性及び諸力の現實なる一圍に注意を固定し、之を一全體として理解し說明せんと企だてることが出來る。是れ具體的科學の方法である。或は吾人は一の關係、一の特有性或は一の力、又は諸關係、諸特有性或は諸力の一部類に注意を固定し、夫れか見出される一切の集合體を通じて夫れを追究することが出來る。是れ抽象的科學の方法である。併し何れの方法も他の助けなくして完全に遂行され得るものでない。抽象は具體的知識を前定する、併し抽象が一たび遂成されたる時には、夫れは先づ一の組織原理として具體的知識の上に引き戻されねばならぬ。是れかくして吾人は始めて何れの集合體をも、完全に理解することが出來るのであるからである。

されば一層精密に科學を分類する仕方は、つまり一の科學が主として關係、特有性或は力を取扱ひ、そうして只必要に應じて時々集合體を取扱ふに止まるものであるならば、之を抽象的科學と認め、之れに反して一の科學が特有性及び力をも取扱ひ、抽象の方法をも使用するが、其の主要目的はあるがまゝに集合體を說明するに在るならば、之を具體的科學と認めることである。

かくて科學の一直線的系列が存立するのではなく、科學は根本的に判然二つの部類に大別され、そうして此の二部類の諸科學は複雜な知識領域の各部分に於て、夫れ〳〵相組み合ひ、此處に相交叉する二つの分類が立てられるのである。(Principles of Sociology, 1896. pp. 47 & 48)

今右に述べしギッディングスの科學論とジムメルの科學論とを比較すると、ジムメルの科學概念全體はつまりギッディングスの抽象的科學の概念と根本的に合致するものであることが發見される。要するにジムメルが科學と稱するものは、スペンサーの抽象的科學の概念にギッディングスが修正を加へたるものに外ならないので、ジムメルの科學概念其物は決して嶄新な見解を創唱せるものでない。只一切の科學は悉く抽象的科學であると考へ、具體的科學の存立を認めなかつたと云ふ點に於てのみ、彼の科學概念の特色が認められるのである。併しかゝる見解は果して正當であるか。總ての科學は只抽象的科學としてのみ成立し得るものにして、具體的科學は全然成立し得ないものであるか。抑々抽象的なるものと具體的なるものとの區別は種々なる意味に解されるが、併し何れの意味に解されても、夫れは決して絶對的な區別ではなく、常に相對的な區別である。かくてギッディングスがスペンサーに從ふて具體的集合體或は單に集合體と稱するもの、又ジムメルが事物の一全體と稱するものも、夫れが一の科學の對象となる場合には、現實に相聯結して存立する他の總てに集合體或は事物の諸全體から切り離されて考察されて居ると云ふ意味にては、一の抽象されたるものであると云ひ得られる。併しギッディングス及びジムメルが

上に述べし意味にて集合體又は事物の一全體と稱するものは、夫れから引き離されて見られる一の形質或は特有性、一の關係、一の力又は其等のもの丶一部類が抽象的であると云はれるに對して、ヤハリ相對的に具體的であると云ひ得られる。そうして其の點に於ては兩者の見解は一致して居る。併しギッディングスはか丶る具體的なるものを理解し說明することは可能であり、かくて具體的科學は成立し得ると考へるに對して、ジムメルは夫れは不可能であると考へた。されば此處にギッディングスが具體的科學の成立は可能であると認める認識論的理由と、ジムメルが不可能であると認める認識論的理由とを比較して、批判的に論斷を下すことは、學問論一般の上から見て甚だ重要なる仕事であり、殊に社會學論の上から見ると吾々にとつて甚だ肝要なる問題である、と云ふのは私の總合社會學と稱するが如きものは、具體的科學の成立が承認されるに於て、始めて建設し得られるものであるからである。併し此の問題は今日殊に獨逸の哲學者間に盛んに論爭されて居る學問論の中心問題に結び附いて居るもので、且つ私自身は目下新しき科學論の建設に努力しつ丶ある際であるから、此處に詳しく論述する事は出來ない。それで只ジムメルが具體的科學の不可能性を主張する見解を、簡單に論評するだけに止めたいと思ふ。尙ほ此の問題に就ては、本論文最後の節「結論＝總合社會學の概念」に於て、更に稍々詳しく論述すること丶する。

右に述べし主旨で、此處では私は只ジムメルが具體的科學の不可能性を主張する認識論的理由を簡單に論評するだけに止めるが、要するにジムメルは先づさきに述べし如く、科學は一の抽象に基いて成立するもの、詳しく云へば何れかの事物の具體的全體を夫れの諸側面の何れかの一に從ふて、或は何れかの一の概念の見地から、考察することによりて成立するものと見る。そうして其の理由を彼の他の諸著作をも參考して究明すると、それはつまり人間の有限なる知力を以て、無限に複合的なる具體的現實態を其の儘に把捉することは不可能にして、吾人は只一定の前定に基き、一定の方面に就て之を科學的に理解し得るだけであると云ふこと、及び科學の目標とする規律性の知識、更に法則の知識は決して無限に複合的なる具體的一全體に就て獲得されるものでなく、只單純化されたる其の一方面に就てのみ獲得し得られるものであると云ふことに歸着すると思ふ。併しよく熟考して見ると、吾人の有限なる知力を以て、無限に複合的なる現實態を完全に把捉することが不可能であるばかりでなく、其の一方面に就ても決して完全なる知識は得られるものでない。只具體的一全體の一方面の知識は、其の全體の知識よりも比較的により多く精密であると云ひ得られるだけである。併し知識の精密は必ずしも知識の確實を意味するものでないことは、社會學者間では既にコントの强調して居た點で、確實なる知識にして不精密なるものがあり、又精密なる知識にして不確實なるものもある。そうして科學的知識の生命は精密性に

あるのでなく確實性にあると云はねばならぬ。云ふまでもなく確實にして精密なる知識、或は精密にして確實なる知識は科學的知識の理想である。そうして吾人は物理的自然に就ては、かゝる理想を接近的に實現し得ると考へられる。併し社會的歴史的現實態に就てはそれは到底不可能である。吾人は此の種の現實態に就ては精密なる知識を得ることは困難である。社會科學に數學式を應用することによりて、精密なる知識を獲得せるものゝ如く假裝することが出來るが、併しかゝる知識も實質的にはヤハリ不精密なるものである。かくて社會科學の認識目標は知識の確實性であつて、其の精密性ではあり得ない。故に科學全體から見れば其の生命は知識の確實性にあると云はねばならぬ。

今右の點をよく了解するに於ては、吾人は具體的現實態の全體に就ては、其の一方面に就てほど精密なる知識を獲得することは出來ないが、併しそれと同等に確實なる知識、或はさほど劣らない程度の確實なる知識を獲得し得ることが覺られると思ふ。但し具體的現實態の全體の知識が、其の一方面の知識と同等な確實の程度に達することは實際上稀れであるかも知れない。併し認識論的には其の可能性は承認し得られると思ふ。尙ほ科學的知識の確實性は科學的知識の性質上相對的なものであらざるを得ないので、科學的知識は無限に進歩し行くものと前定されて居る以上、何れの場合にありても當面の科學的知識は如何に確實であつても、其の確實性は本來相對

的なものである可きである。

私は右に述べし理由、並に更に後に述べんとする理由によりて、具體的なる現實態の全體の知識は、其の一方面の知識と同樣に、タトヒ同等に精密でなく、又同等に確實でもなくして、多少劣る處があるとしても、科學的に獲得し得られるものと考へ、かくて具體的科學の可能性を認め、ジムメルの見解に反してギッディングスの見解を是認せんとするのである。但しギッディングスが具體的科學の可能性を主張する認識論的理由は甚だ不完全不充分であつて、それは更に深く究明されねばならぬ。尙ほ私はギッディングスが科學を根本的に判然抽象的科學と具體的科學とに區別せんとする見解（但しそれはコント及びスペンサーの說を繼承するものである）を承認することは出來ない。そうして私は此の區別は同一の科學內に於ける二つの根本的部門の區別であると認める。かくて私は社會學に就ても、一方に於ては其の抽象的部門として純正社會學或は形式社會學の部門の成立を承認し、ジムメルの說に修正を加へて之を是認すると同時に、他方に於ては其の具體的部門として總合社會學の成立を承認し、ギッディングスの說にヤハリ修正を加へて之を是認するのである。

ジムメルは又上に述べし如く科學の認識目標は規律性或は法則の決定にあると云ふ見地からして、科學は總て彼の解するが如き具體的なる現實態の一の特殊的方面を抽象して、之を對象とする抽象的科學であらねばならぬと考へるのである。是れ彼の見る處によれば、規律性或は法則は

決して具體的なる現實態の複雜なる全體に就て決定し得られるものでなく、只夫れから抽象されたる一の形質或は機能或は關係に就てのみ決定し得られるものであるからである。併し私の見解によれば、規律性(因果聯結の意味での)或は法則が決定し得られるや否やは社會學に於ては無關心な問題である。是れ私は科學を根本的に理解科學と了解科學とに大別し、理解科學は規律性或は法則、卽ち普遍的又は個性的なる因果聯結を決定することを、其の主要なる一の認識目標となすものであるが、了解科學は之れと異なりて普遍的又は個性的なる志向聯結或は合目的聯結を決定することを其の認識目標となすものであり、そうして社會學は一の了解科學である可きものにして、一の理解科學である可きものでないと考へるからである。

(b)社會化の形式は如何にして其の內容から分離されて、一の獨立なる科學の對象とされることが出來るか。

さきに述べし如くジムメルは社會化の形式が其の諸內容から區別されて、一の獨立なる科學の對象とされ得ると云ふことを以て、一の獨立なる科學としての社會學の成立し得る根本條件否な唯一條件と考へたのであるから、彼は社會化の形式と內容との區別を甚だ重要視し、「社會學」第一章に於ては千八百九十四年の論文「社會學の問題」に於てよりは、更に詳しく之を論述して居る。併し私は夫れによりてジムメルは彼自身の見解よりは、寧ろ之れに加へる私の批判(卽ち社

會化の形式は其の諸內容と同樣に社會の特殊的一方面であるのでなく、其の諸內容が夫れ〴〵特殊的一方面たるに反して、之れに對して一般的なるもの或は一般的方面であると云ふこと）の主旨を益々確證して居ると思ふ。併し此處にはさきに述べし批判を再び繰り返して、更に詳しく論ずる餘白はないから、（此の問題に就て私はジムメルの見解とギッディングスの同類意識說の正當なる解釋との間に、甚だ微妙なる契合の存在するを觀破し、それによりて私自身の見解を更に確證せんとするのであるが、此處には其の餘白はないから他日の機會に讓る。）直ちに社會化の形式は如何にして其の內容から區別され分離され得るかと云ふ問題を考案することゝする。

千八百九十四年の論文に於ては、ジムメルはさきに述べし如くに簡單に社會學を幾何學に比し、そうして幾何學が物體の質料の如何を問はず、又其等の質料の研究は他の科學に委ね、それから抽象したる空間的形式を其の對象となすが如くに、社會學は社會化の內容如何を問はず、又其等の諸內容の研究を他の科學に委ね、それから抽象したる社會化の形式を其の對象となすものにして、かくて幾何學が一の獨立なる科學と認められて居るのと同樣に、一の獨立なる科學と認めらる可きものと論じて居るのである。併し「社會學」第一章に於ては彼は社會學と幾何學との類比を更に詳しく且つ根本的に論述して居る。然るに私はさきに千八百九十四年の論文に於ける彼の所見を批判せる際に述べし如く、今日の數理哲學や學問論によりて考ふれば、幾何學を始め一切の數學的學科は、社會學の屬す可き經驗科學とは根本的に性質を異にするものであるから、幾

何學との類比に基いて形式社會學の可能性を推論せんとするは、論理學上の重大なる一誤謬であると云はねばならぬと思ふ。かくてジムメルは千八百九十四年の論文に於ては、只形式社會學の概念を提唱して居るだけであつて、まだ其の成立の論理的基礎或は理由を論證して居ないのである。然らば「社會學」第一章に於ける彼の詳しき且つ根本的な論述は、形式社會學の概念を論理學的によく論證して居ると、認め得られるであらうか。

「社會學」第一章に於ては、ジムメルは千八百九十四年の論文に於けると同樣に、先づ社會學と幾何學との類比を述べたる後、左の如く附言して居る。

幾何學との此の類比は、此處に夫れによりて企だてられたる處の、社會學の根本問題を明示せんとすることより以上に進まないものであると云ふことは、敢て特に言述する必要はないと思ふ。先づ第一に幾何學は其の領域に於て、より複雜な諸圖形が分析され得る非常に單純なる諸形體を眼前に見當り、かくて比較的に小數の基本的規定から有り得る諸形體の全範圍を構成すると云ふ長所を有する。然るに社會化の諸形式に對しては、單純なる諸元素に只接近的に分析することすらも、近い內には期待さるる可きでない。かくて社會學的諸形式は或度に於て規定されて居ると云はれる時でも、只現象の比較的に狹い範圍に對して妥當するだけである。されば例へば上位と下位(Ober- und Unterordnung)との關係は殆んど總ての人間的社會化に於て見出される一の形式化であると云はれるとも、此の一般的知識によりて殆んど何物も學ばれない。そうして吾人は更に上位と下位との關係の個別的諸種類、其の實現の特殊的諸形式を詳しく研究しなければならない。そうして此の際上位と下位との關係が詳しく規定されるにつれて、其の妥當の範圍は自から縮小するのである。

今右の言葉によりて見れば、ジムメルが社會學を幾何學に類比する主意は、物體の諸內容から抽象せる空間的形式を研究する一の獨立なる學問として幾何學が現に存立して居ると云ふ事實を指摘して、以て社會化の諸內容から抽象せる其の形式を研究する一の獨立なる科學としての社會

學の可能性を、單に指示せんとするに止まるが如くに考へられる。併し若し只夫れだけがジムメルの主意であつたとするも、彼の所論は非學問論的なものであると云はねばならぬ。是れ幾何學は內容から形式を抽象して之を對象とする學問として存立して居るものゝ如く見ゆるとも、眞實には夫れは決して經驗的に物體の內容から其の對象とする形式を抽象するものでなく、其の對象たる形式なるものは本質的には內容に頓着なく、又經驗に囚はれずして、思惟論理上設定された觀念的なるものであつて、吾人は經驗的に社會化の內容から抽象されるものと見る可き社會化の形式とは、決して論理的に同一視さる可きものでないからである。幾何學の存立は、形式社會學の可能性を論證することに對しては無關係であるばかりでなく、單に其の可能性を指示するだけの論理的意義をも有しないのである。

併しジムメルが社會學を幾何學に類比する主意は、單に右に述べしが如きものに止まつて居ないことは、上に引用せる彼の言葉に次で彼の論述して居ることによりて推察されると思ふ。そうして其の論述の中には千八百九十四年の論文中に全く存しない思想が見出されるが、それはつまり千九百年以後に起れる彼の思想の重大なる變動の結果として生まれたるものと思はれる。今ジムメルは、社會化の形式は種々相異なれる諸內容間にありて絕對的同樣性を保持するや否やは敢て論ずるの必要なく、只接近的同樣性の存立するだけで充分であること、社會化の形式と內容と

の分離が完全に實現されないのは、是れつまり決して完全に合理化され難き種々なる動搖及び複雜性を具有する歷史的精神的事象を取扱ふ社會學と、それの概念に支配される諸形式を、質料に於ける其の實現から絕對的に純粹に引き離し得る幾何學との差異を明示するものなること、人間的及び物件的質料の差異に拘はらず相互作用の仕方が保持する此の同樣性及び其の逆は、先づ第一には只個々の全體的諸現象に於て形式と內容との科學的區別を立て且つ正當とする爲めの一の補助手段に外ならぬこと、更に此の形式と內容との區別は、事實の狀態がかの差異するものから同樣的なるものを結晶化させる歸納的方法を一般的に使用するを許さない場合でも、方法論的には必要とされるので、恰かも一の物體の空間形式の幾何學的抽象は、其の形式によりて形成されて居る此の如き物體が、只一度しか存在しない時でも正當であるのと同じであること等を論じたる後、左の如く述べて居る。

此處に此の方法に一の困難が伴なふて居ることは明白である。例へば左の如き事實が見出されるとする。即ち中世紀の終り頃に或同業組合の親方等が、原料の調達や職人の使用などに關する商業關係が大に擴大せるが爲めに、舊組合原則(それによれば各親方は他の總ての親方と同等な「生計」を營む可きものである)に最早適合しない處の顧客牽引の新手段を工夫せねばならなくなり、かくて傳來の狹隘なる組合を脫退せんと努力したと云ふ事實である。今特殊的內容から抽象される純社會學的形式に注目すると、此事實はつまり個人が其の行動により結び附けられて居る社會圈の擴大は、個人の特殊的個性、より大なる自由及び相互的分化の愈々強大なる發展を伴なふものなることを意味するのである。然るに私の知る限りでは、其の內容によりて實現されて居る有の複合的なる事實から、此の社會學的意味を引き出す爲めに用ひらる可き、確實に有効なる方法は全く存在しない。如何なる純社會學的形式、如何なる個人間の特殊な相互關係が、個人に於て持續する諸關心及び諸衝動、并に純物件的性質の諸條件から切り離されて、歷史的事象中に含有されて居るかと云ふ問題は、幾多の種々なる方針に於て解釋し得られるのみならず、更に吾人は確定せる社會學的諸形式の現實に存立することを證明する歷史的諸事實をも、只其の質料的或は具體的總體に於て引

證し得るだけで、其の事實の質料的要素と形式社會學的要素との分離を人々に明瞭に敎示し、あらゆる事情の下で此の分離を完成し得る手段を有しないのである。其の事は數學者が偶然性及び粗雜性の避け得られない一の畫かれたる圖形を用ひて、一の幾何學的命題を證論せんとするのに似て居る。併し此の際數學者は、理想的な幾何學的圖形の概念が熟知され且つ現に運用されて居り、そうして白墨又はインキで畫かれたる圖形の當面の唯一の本質的意味として、內面的に觀照されて居ると、前定することが出來る。然るに社會學者は此の場合に同樣な前定をなすことが出來ない。純社會化は眞に如何なるものであるかは、複合的なる全體現象から論理的强制的に引き出さる可きものでない。

此處に吾人は直覺的方法（如何程思辨的形而上學的直覺から遠ざかつて居るとも）、洞觀の一の特殊な見地（依て以て形式と內容との區別が成就され、又此の區別が後に概念的に表現し得られる處の確實に吾人を指導する方法に於て把捉されるまでは、吾人は只諸實例を引き出して之を考察することによりてのみ到達し得る洞觀の一の特殊な見地）を云々する非難を敢て負はねばならぬ。尙ほ右の困難は左の事實によりて更に高められる。卽ち社會學的基本概念の適用に對しては、疑はれない確乎たる把手が缺けて居るのみならず、一の社會學的基本概念が有效に經用される場合に於てさへも、現實なる事象の多數の諸要素は其の社會學的基本概念の下に取り入れらる可きか、又は內容的に規定されて居るものの概念の下に取り入れらる可きかは、屢々考察者の任意な所置に委ねられねばならぬと云ふ事實である。例へば「貧困者」の現象は如何程まで社會學的性質のものであるか、詳言すれば人間の集合に於て必然的に產出される一般的諸潮流及び諸推移によりて制約される處の、一團體內の形式的關係の一結果であるか、又は貧困は全く經濟的利益內容の見地のみから見て、一定の個人的生存の只物質的なる一の規定と見做さる可きものであるか。是れに就ては正反對な意見が立て得られるのである。

抑々吾人は歷史的現象を全體から見て、三つの根本的見地に於て考察することが出來るであらう。其の一は歷史的狀態の現實的遲戚者たる個人的存在の見地にして、其の二は形式的相互作用諸形式の見地（此等の諸形式は確かに只個人的存在に於ても行はれるが、併し此の場合には個人的存在の見地からでなく、彼等の結合、彼等の相互關係の見地から考察される）、其の三は歷史的狀態及び事象の概念的に公式化され得る內容の見地（此等の內容は此の場合には其の個人的遲戚者や又彼等の間の關係に就て考察されるのでなく、其の絕當體的或は物件的意義に就て、卽ち經濟及び技術に就て、藝術及び學問に就て、法律規範及び感情生活の生產物に就て考察される）である。此等三つの見地は絕へず相交叉し、三者を相互に區別して行く方法論的必要は、各々を他から獨立せる系列に於て排列する困難、及び總ての立場を包括する現實態の全體的形象を求める念によりて幾度も妨害される。そうして一の見地が他の見地を基礎附け又他の見地によりて其礎附けられて、如何程深く他の見地の中に入り込んで居るかは、決して總ての場合に於て確實に見定め得られるものでない。かくて根本的見地或は問題呈出の仕方が方法論的に明瞭に且つ判然區別されて居るに拘らず、個々の問題の取扱ひは時としては一の範疇に、時としては他の範疇に屬するが如くに見へ、更に一の見地內にありても其の取扱ひ仕方は、常に他の見地の取扱ひ仕方に對して確實に限定されて居ないと云ふ曖昧は、殆んど避け得られないであらう。更に私は此處に私の論述する社會學の方法論は、此の抽象的な基礎據へ附け方よりは、個々の諸問題の詳しき研究からして一層確實に、恐くは一層明瞭にさへ理解されるであらうと希望する。吾人が避け得られない比喩に從ふて基礎と稱せねばならぬものが、其の上に築かれたる建設物ほど確立して居ないと云ふことは、精神的事物にありては決して稀

有なことでない、否な最とも普遍的な且つ最とも深奥な問題範域にありては、寧ろ一般的な事實である。そうして科學的研究も亦、殊に從來開拓されなかつた諸範域にありては、一定の度合の本能的仕方或は取扱ひ（ein gewisses Mass instinktiven Vorgehens。其の動機及び規範は後に始めて完全に明瞭に意識され、概念的に仕上げられる處の）を缺くことが出來ないであらう。されば科學的研究はかのまだ不明な、本能的な、只個別研究に於て直接に實効を奏するに止まる樣な取扱ひ方法にのみ全然依頼することは、何れの時期にありても決して許されないが、しかも人若し新しき問題の研究を始めるに當つても、完全に殘りなく公式化されたる方法論を、既に其の第一歩の必要條件となさんとするならば、それはつまり始めから科學的研究に無効の宣告を下すことになるであらう。

さて右に述べたるジムメルの思想に就ては、嚴密なる批判を加へたい點は少なくないが、此處に一々論述して居る餘白はないから、只社會化の形式を其の內容から抽象する或は切り離す可能性に就て、彼が幾何學との類比によりて論述して居る事を、簡單に論評するだけに止める。尙ほ其他の點に就ては次に社會學と心理學との關係、及び社會學と哲學との關係に關する彼の見解を論評する際に、論じ及ぼしたいと思ふ。

今上に述べし處によりて知られる如く、ジムメルは幾何學に類比して形式社會學の概念を確立せんとしながら、しかも方法論上兩者の間に存在する重大なる差異にも注目し、かくて形式社會學は幾何學と同一の方法によりて、幾何學と同樣に確實なる形式の科學として確立され得るものでないことを明白に論述して居る。併し彼が形式社會學と幾何學との類似に就て論述して居る方面を詳しく吟味して見ると、彼は表面上では其の類似は單に比喩に止まるもの、或は一の補助手段に過ぎないものゝ如く論じて居るに拘らず、奥底に於ては重要なる方法論的類似の存在する

ことを認めて居ると察知される。詳しく論ずる餘白はないから簡單に述べて置くが、要するにジムメルの論ずる處によれば、幾何學は先づ其の領域内の最とも單純なる構成物を眼前に見出し卽ち直觀し、それより複合的な構成物を論理的に構成し、又は複合的なる構成物を單純なる構成物に論理的に分析するのである。そうして其の單純なる構成物を表現する爲めに、又複合的なる構成物を論理的に構成し又は分析する爲めに、偶然性及び粗雜性を脫し難き圖形を、何等かの質料を用ひて人爲的に畫くが、併し本來かゝる圖形の偶然性や粗雜性に毫も拘束されないで、只之を絕對的に純粹にして同一的なる空間的形式卽ち觀念的なる形式のシムボルとして利用するだけである。然るに今形式社會學の取扱ふ形式は絕對的に純粹なるものでなく、只相對的に純粹であるに止まり、又絕對的に同一的でなく、只接近的に同樣的であるに止まるものにして、かくて形式社會學は幾何學の如く純粹なる形式の科學であることは出來ず、隨ふて幾何學の方法を其の儘に運用することは出來ないが、併し幾何學が其の最とも單純なる形式を眼前に見出す卽ち直觀する如く、其の形式を先づ一種の「直覺的方法」、或は「洞觀の一の特殊な見地」、或は「或度の本能的仕方或は取扱ひ」によりて見定めるので、其の點に於て幾何學の方法に似て居るのである。併し形式社會學が此の如くにして見定める形式は、幾何學の形式の如くに絕對的に純粹な又同一的なものでなく、只大體上の輪廓を表示するに過ぎないものにして、更に具體的事象に就て徵驗された

る後に、段々相對的に純粹な又接近的に同樣的なものに練り上げられるのである。

ジムメルが「社會學」第一章に於て、幾何學と比較して形式社會學の概念を確定せんとする根本的主旨は、つまり右に述べしが如きものであると思はれるのであるが、それによりて彼は形式社會學の概念の確立に於て、千八百九十四年の論文以上に進んで居ることが學ばれると同時に、幾何學との類比は全く無用であること、否な此の類比の使用は幾何學の學問論的特質を理解して居るものをして、却て彼の眞意を把捉するに少なからぬ困難を感じさせることが覺られる。要するに形式社會學は先づ一種の「直覺的方法」或は「洞觀の一の特殊なる見地」によりて、社會化の形式の大體上の輪廓を見定め、それより具體的事象に就て徵驗し行くことによりて、之を益々概念的に確定し、かくて社會化の形式を對象とする一の獨立なる社會科學として確立されるものなることを論證する爲めには、幾何學との類比は無用である、否な却て一の妨害となると思はれる。吾人は寧ろ幾何學との類比論を離れて、彼の眞意をよく了解することが出來るのである。そうして私は右に述べし如くにジムメルの眞意を解することによりて、彼の形式社會學の方法は私の純正社會學の方法と根本的には一致して居ることを覺るのである。

抑々ジムメルが此處に一種の「直覺的方法」とか「洞觀の一の特殊な見地」とか稱するが如きものは、千八百九十四年の論文中には全く存在しないものにして、千九百年頃以後の彼の思想の變動

からして、發達せるものであると思はれる。そうして彼は、彼の直覺的方法は、如何に「思辨的形而上學的直覺から遠ざかれる」ものと考へるとも、夫れは對象論の方法や現象學の本質諦觀なぞと、同じ方針に屬するものであると思はれる。併し彼は現象學が本質諦觀に就て主張する如く一實例に就て一度に其の本質を完全に諦觀し洞見し得るものと考へず、洞觀の一の特殊なる見地は只幾多の實例を引き出して考察することによりてのみ到達し得られるものと考へ、且つ夫れによりて見定められたる本質の輪廓は、更に實例に就て徵驗されるにつれて益々確定されると考へて居ると思はれる。そうして是れ實に、私が現象學の方法を社會的現實態の研究に適用するに就て、夫れに加へて居る修正と大體上一致する見解にして、又タールドの方法やヅュルケムの方法なぞに於ても、其の深い根底に於て發見されるものである。

私は以上述べしが如くにジムメルの眞意を解することによりて、彼は幾何學との類比に基いて彼の形式社會學の概念を基礎附け確立したのではなく、それとは關係なく、千九百年頃以後の彼の思想の變動から發達せる考方によりて、始めて彼の形式社會學概念の基礎附けを成就したと考へるのである。尙ほジムメルの形式社會學の方法論に就ては、次に社會學と心理學との關係に關する彼の思想を批判する場合に、更に詳しく論ずることゝする。